

## 安息日 各時代の希望 第29章

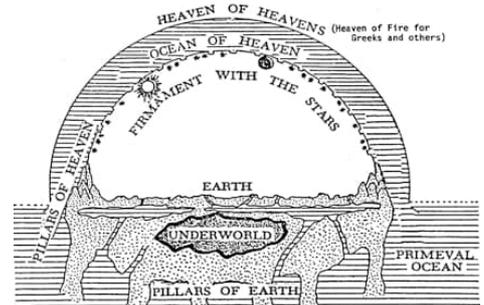
安息日は創造の時に聖とされた。それは人のために定められたのだから、その起源は「明けの星は共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」時にあった(ヨブ38:7)。平和が世界をおおっていた。地が天と調和していたからであった。「神が造ったすべての物を見られたところ、それは、**はなはだ良かった** (聖書協会共同訳: **極めて良かった**)」(創世記1:31=口語訳: 神が造ったすべての物を見られたところ、それは、**はなはだ良かった**。夕となり、また朝となった。第六日である)。そこで神は、みわざを完成されたよろこびのうちに休息された。▲

**【参考】** 天と地、そしてその森羅万象の完成(創世記1:1~2:3、聖書協会共同訳、以下同じ)

初めに神は天と地を創造された。2 地は混沌として、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。3 神は言われた。「**光あれ。**」すると光があった。4 **神は光を見て良しとされた。** 神は光と闇を分け、

5 **光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。** 夕べがあり、朝があった。  
第一の日である (→**第一の日: 光の創造⇒光を「昼」、闇を「夜」としました。**)。

6 神は言われた。「**水の中に大空があり、水と水を分けるようになれ。**」7 神は**大空**を造り、**大空の下の水と、大空の上の水と**を分けられた。そのようになった。8 神は**大空**を**天**と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。**第二の日**である (→**第二の日: 大空[天]の創造⇒大空の下の水と大空の上の水に分けられました。**)。



9 神は言われた。「**天の下の水は一か所に集まり、乾いた所が現れよ。**」そのようになった。10 神は乾いた所を**地**と呼び、水の集まった所を**海**と呼ばれた。**神は見て良しとされた。**

11 神は言われた。「**地は草木を生えさせよ。種をつける草と、種のある実を結ぶ果樹を、**それぞれの種類に従って地上に生えさせよ。」そのようになった。12 地は**草木**を生じさせ、**種をつける草**をそれぞれの種類に従って、**種のある実をつける木**をそれぞれの種類に従って生じさせた。**神は見て良しとされた。**13 夕べがあり、朝があった。**第三の日**である (→**第三の日: 地と海の創造⇒地に草木・種のある実を結ぶ植物・種のある実をつける木を生えさせました。**)。

14 神は言われた。「**天の大空に、昼と夜を分ける光るものがあり、季節や日や年のしるしとなれ。**15 天の大空に光るものがあって、地上を照らせ。」そのようになった。16 神は二つの大きな光るものを造られた。**昼を治める大きな光るもの**と、**夜を治める小さな光るもの**である。また**星**を造られた。17 神は地上を照らすため、それらを天の大空に置かれた。18 昼と夜を治めるため、光と闇を分けるためである。**神は見て良しとされた。**19 夕べがあり、朝があった。**第四の日**である (→**第四の日: 光るものの創造⇒太陽(昼を治める大きなもの)、月(夜を治める小さな光るもの)、そして星を造られ、季節や日や年のしるしとされました。**)。

20 神は言われた。「**水は群がる生き物で満ち溢れ、鳥は地の上、天の大空を飛べ。**」21 神は大きな**海の怪獣**を創造された。**水に群がりうごめくあらゆる生き物**をそれぞれの種類に従って、また、**翼のあるあらゆる鳥**をそれぞれの種類に従って創造された。**神は見て良しとされた。**22 神はそれらを祝福して言われた。「**産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。鳥は地に増えよ。**」23 夕べがあり、朝があった。**第五の日**である (→**第五の日: 水に群がる生き物[海の怪獣]と鳥の創造。**)。

24 神は言われた。「**地は生き物をそれぞれの種類に従って、家畜、這うもの、地の獣**をそれぞれの種類に従って生み出せ。」そのようになった。25 神は**地の獣**をそれぞれの種類に従って、**家畜**をそれぞれの種類に従って、**地を這うあらゆるもの**をそれぞれの種類に従って造られた。**神は見て良しとされた。**

26 神は言われた。「**我々のかたちに、我々の姿に人を造ろう。そして、海**の魚、空の鳥、家畜、地のあらゆるもの、**地を這うあらゆるものを治めさせよう。**」27 神は**人**を自分のかたちに創造された。／神のかたちにこれを創造し／**男と女**に創造された。28 神は彼らを祝福して言われた。「**産めよ、増えよ、地に満ちて、これを従わせよ。海**の魚、空の鳥、**地を這うあらゆる生き物を治めよ。**」29 神は言われた。

「私は全地の面にある、種をつけるあらゆる草と、種をつけて実がなるあらゆる木を、あなたがたに与

えた。それはあなたがたの食物となる。30 また、地のあらゆる獣、空のあらゆる鳥、地を這う命あるあらゆるものに、すべての青草を食物として与えた。」そのようになった。31 神は、造ったすべてのものを御覧になった。それは**極めて良かった**。夕べがあり、朝があった。第六の日である（→第六の日：地の動物[家畜、野の獣、地をはうもの]と人間[男と女]の創造）。

2：1 こうして天と地、そしてその森羅万象が完成した。2 第七の日に、神はその業を完成され、第七の日に、**そのすべての業を終えて休まれた**。3 神は第七の日を祝福し、これを聖別された。その日、神はすべての創造の業を終えて休まれたからである（→第七の日：神は創造の業を完成され、この日を祝福して安息の日とされました）。

▼ 神は安息日に休息されたので「神はその第7日を祝福して、これを聖別された」—すなわちこの日を聖なるご用のためにとりわけられた(創世記2：3)。神はこの日を休息の日としてアダムにお与えになった。それは創造のみわざの記念で、神の力と愛のしるしとなった。「主はそのくすしきみわざを記念させられた」と聖書に書かれている(詩篇111：4＝主は奇しき業を記念するよう定めた。／主は恵みに満ち、憐れみ深い)。「被造物」は「神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性」とを「天地創造このかた」宣言している(ローマ1：20＝神の見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造以来、被造物を通してはっきりと認められるからです。したがって、彼らには弁解の余地がありません)。

万物は神のみ子によって造られた。「初めに言があった。言は神と共にあった。……すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった」(ヨハネ1：1～3)。安息日は創造のみわざの記念であるから、それはキリストの愛と力のしるしである。

安息日はわれわれの思いを自然に向けさせ、われわれを創造主とのまじわりに入らせる。鳥の歌に、木々のささやきに、海の調べに、われわれは日の涼しいころエデンの園でアダムとお語りになった神のみ声をいまもきくことができる。こうしてわれわれは、自然界の中に神の力を見る時、そこに慰めを見いだすのである。なぜなら、万物をおつくりになったみことばは、魂にいのちを語ることばだからである。『やみの中から光が照りいでよ』と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して下さったのである」(IIコリント4：6)。

歌を呼び起したのはこの思いであった。—

「主よ、あなたはみわざをもって／わたしを楽しませられました。わたしはあなたのみ手のわざを喜び歌います。主よ、あなたのみわざは／いかに大いなることでしょう。あなたのもろもろの思いは、いとも深く」(詩篇92：4、5)。

聖霊は、預言者イザヤを通して、こう宣言しておられる。「それで、あなたがたは神をだれとくらべ、どんな像と比較しようとするのか。偶像は細工人が鋳て造り、鍛冶が、金をもって、それをおおい、また、これがために銀の鎖を造る。貧しい者は、ささげ物として朽ちることのない木を選び、巧みな細工人を求めて、動くことのない像を立たせる。あなたがたは知らなかったか。あなたがたは聞かなかったか。初めから、あなたがたに伝えられなかったか。地の基をおいた時から、あなたがたは悟らなかったか。主は地球のはるか上に座して、地に住む者をいなごのように見られる。主は天を幕のようにひろげ、これを住むべき天幕のように張り、また、もろもろの君を無きものとせられ、地のつかさたちを、むなしくされる。彼らは、かろうじて植えられ、かろうじてまかれ、その幹がかろうじて地に根をおろしたとき、神がその上を吹かれると、彼らは枯れて、わらのように、つむじ風にまき去られる。聖者は言われる、『それで、あなたがたは、わたしをだれにくらべ、わたしは、だれにひとしいというのか』。目を高くあげて、だれが、これらのものを創造したかを見よ。主は数をしらべて万軍をひきいだし、おののその名で呼ばれる。その勢いの大きいなるにより、またその力の強さがゆえに、1つも欠けることはない。ヤコブよ、何ゆえあなたは、『わが道は主に隠れている』と言うか。イスラエルよ、何ゆえあなたは、『わが訴えはわが神に顧みられない』と言うか。あなたは知らなかったか、あなたは聞かなかったか。主はとこしえの神、地の果の創造者であって、弱ることなく、また疲れることなく、その知恵ははかりがたい。弱った者には力を与え、勢いのない者には強さを増し加えられる。」「恐れてはならない、

わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもって、あなたをささえる。「地の果なるもろもろの人よ、わたしを仰ぎのぞめ、そうすれば救われる。わたしは神であって、ほかに神はないからだ」(イザヤ 40 : 18 ~ 29、41 : 10、45 : 22)。

以上の聖句は、主なる神の偉大さと唯一性を強調している。人が造る偶像は、職人が金や銀、木を用いて作るにすぎず、真の神に比べることはできない。主は地のはるか上に座し、天地を造られ、すべての星を数え、その名を呼ばれる全能の創造主である。人の支配者や権力も、神の前では風に吹かれるわらのようにはかなく消えてしまう。それゆえ神は、「わたしをだれに比べるのか」と問いかけられる。しかしこの偉大な神は、人を見捨てることはない。弱った者に力を与え、疲れた者を強めてくださる。神は「恐れてはならない。わたしがあなたと共にいる」と励まし、御手をもって支えてくださる。そして「地の果てのすべての人よ、わたしを仰ぎ見よ。そうすれば救われる」と招かれる。主こそ唯一の神であり、救いの源なのである。

これが自然の中に書かれているメッセージで、安息日はこのメッセージを記憶にとどめるために定められているのである。主は、イスラエルに安息日をあがめるようにお命じになった時、こう言われた。「わが安息日を聖別せよ。これはわたしとあなたがたとの間のしるしとなって、主なるわたしがあなたがたの神であることを、あなたがたに知らせるためである」(エゼキエル 20 : 20)。

安息日は、シナイで与えられた律法の中に具体的に表現されたが、しかしその時はじめて休みの日として知らされたのではなかった。イスラエルの民はシナイへ来る前に安息日についての知識をもっていた。そこへ行く道中、安息日は守られた。安息日をけがす者があると、主は彼らを責めて、「あなたがたは、いつまでわたしの戒めと、律法とを守ることを拒むのか」と言われた(出エジプト 16 : 28)。

安息日はイスラエルのためだけでなく、世界のためであった。それはエデンで人に知らされ、十戒中の他の戒めと同じに、不滅の義務である。この第4条が一部となっている律法について、キリストは、「天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはな」と宣言しておられる(マタイ 5 : 18)。天と地がつづくかぎり、安息日は、創造主の力のしるしとしてつづくのである。そしてエデンがふたたびこの地上に栄える時に、神の聖なる休日は、天下のすべての者によってあがめられるのである。安息日ごとに、輝く新天地の住民は「わが前に来て礼拝する」と主は言われる(イザヤ 66 : 23)。

ユダヤ人に与えられた制度の中で彼らを周囲の国民から区別するのに安息日ほど役立ったものはなかった。神は、安息日を守ることを神の礼拝者である証拠となるように計画された。それは、彼らが偶像礼拝から離れ、真の神とつながっていることの証拠となるのであった。しかし安息日を聖とするためには、人は自ら聖でなければならない。信仰によって彼らはキリストの義にあずかる者とならねばならない。「安息日を覚えて、これを聖とせよ」との命令がイスラエルに与えられた時、主はまた彼らに、「あなたがたは、わたしに対して聖なる民とならなければならない」と言われた(出エジプト 20 : 8、22 : 31)。このようにしてのみ、安息日は、イスラエルを神の礼拝者として区別することができた。

ユダヤ人が神から離れ、信仰によってキリストの義を自分の義としなかった時、安息日は彼らにとって、その意義が失われた。サタンは自分自身を高め、人々をキリストからひき離そうとつとめていた。そして彼は、安息日がキリストの力のしるしなので、これをゆがめるために働いた。ユダヤ人の指導者たちは、神の休みの日をやっかいな規則づくめにすることによって、サタンの意図を達成した。キリストの時代に、安息日はまったくゆがめられていたので、安息日を守ることは、愛に富まれる天父のご品性よりはむしろ利己的でわがままな人間の品性を反映していた。ラビたちは、神が、人の守ることのできない律法をお与えになっていると事実上言っているのも同然だった。彼らは、人々に、神を暴君としてみさせ、神のご要求通りに安息日を守る時に、人は無情になり残酷になると考えさせた。このような誤った観念をとり去ることがキリストの働きであった。ラビたちは冷酷な敵意をいだいてキリストについてまわったが、キリストは彼らの規則に一致しようとする様子さえお見せにならないで、神の律法に従って安息日を守りながらまっすぐ進まれた。

ある安息日に、救い主は、弟子たちと礼拝の場所から帰りながら、みのった麦畑を通りかかられた。

イエスが遅い時間まで働きをつづけられたので、弟子たちは、畑を通りながら麦の穂をつみ、手でもんで、中の穀粒を食べ始めた。

ほかの日だったら、この行為について人から何も言われることはなかった。麦畑や果樹園やぶどう園などを通りすぎる人は、食べたいものを自由にとってもよかったからである(申命記 23 : 24、25 参照)。しかし安息日にそうすることは、安息日をけがす行為とみられた。麦をつむことが一種の収穫であるばかりでなく、それを手でもむことも一種の脱穀であった。こうして、ラビたちの意見によれば、二重の罪となるのであった。

スパイどもはすぐイエスに、「ごらんなさい、あなたの弟子たちが、安息日にはしてはならないことをしています」と文句を言った(マタイ 12 : 2)。

イエスは、ベテスダで、安息日を犯されたとの非難を受けられた時、ご自分が神のみ子であることを主張され、ご自分が天父と一致して働いておられることを宣言して、ご自分を弁護された。いま弟子たちが攻撃されたので、イエスは、旧約聖書から神の奉仕にたずさわっている人たちによって安息日になされた行為を例として引用し、それを非難者たちにお示しになる。

ユダヤの教師たちは、彼らの聖書の知識について誇っていたが、救い主の答えには、彼らが聖書を知らないことについて、暗黙の譴責があった。イエスは言われた、「あなたがたは、ダビデとその供の者たちが飢えていたとき、ダビデのしたことについて、読んだことがないのか。すなわち、神の家にはいって、祭司たちのほかだれも食べてはならぬ供えのパンを取って食べ、また供の者たちにも与えたではないか」。「また彼らに言われた、『安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない。それだから、人の子は、安息日にもまた主なのである』」。「また、安息日に宮仕えをしている祭司たちは安息日を破っても罪にはならないことを、律法で読んだことがないのか。あなたがたに言うておく。宮よりも大いなる者がここにいる」(ルカ 6 : 3、4、マルコ 2 : 27、28、マタイ 12 : 5、6)。

ダビデが、聖なる用にとっておかれたパンを食べて空腹を満たしたことが正しかったならば、弟子たちが安息日の聖なる時間に麦をつんで、彼らの必要を満たしたことは正しかった。また宮の祭司たちは、安息日にはほかの日よりも大きな働きをした。世俗の働きを同じようにすれば罪となるのであるが、祭司の働きは神の奉仕であった。彼らはキリストのあがないの力をさし示す儀式を行っているのであって、その働きは安息日の目的と一致していた。しかしいま、キリストご自身がおいでになっていた。弟子たちは、キリストの働きをすることによって、神の奉仕にたずさわっていた。そしてこの働きを遂行するのに必要なことを安息日にすることは正しかった。

キリストは、弟子たちにも敵にも、神の奉仕が何よりも第一であることを教えようとお思いになった。この世における神の働きの目的は、人のあがないである。したがって、この働きをなしとげるために安息日にしなければならないことは、安息日の律法と一致している。イエスは次にご自分の議論のしめくりとして、ご自身のことを、「安息日の主である」—すなわちご自分があらゆる問題、あらゆる律法を超越するお方であることを宣言された。この無限の審判者であられるお方は、弟子たちが犯しているという非難されたその戒めに照らして、彼らの非難が不当であることを宣言された。

イエスは反対者たちに譴責を加えただけでこの問題をすまされなかった。イエスは、彼らが盲目になっているために、安息日の目的を誤解しているのだと宣言された。「『わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない』とはどういう意味か知っていたなら、あなたがたは罪のない者をとがめなかったであろう」と主は言われた(マタイ 12 : 7)。彼らの**熱意のない多くの儀式は、神の真の礼拝者たちの特徴であるまごころとやさしい愛に欠けているところを埋め合わせることができなかった。**

ふたたびイエスは、いけにえそのものには何の価値もないという事実をくりかえされた。それは手段であって目的ではない。その目的は人を救い主にみちびくことで、そうすることによって人を神と一致させるのである。**神がとうとばれるのは愛の奉仕である。これが欠けている時に、単なる儀式のくりかえしは、神にとって不快なものとなる。安息日も同じである。安息日は人を神と交わらせるために計画された。**しかしあきあきするような儀式に人の心が奪われた時、安息日の目的はさまたげられた。単にうわべだけの安息日遵守は徒勞であった。

またほかの安息日に、イエスは会堂にお入りになって、そこに手のなえた男をごらんになった。パリサイ人は、イエスがどうされるか熱心に見守っていた。救い主は安息日に人をいやせば律法を破る者と（パリサイ人たちから）みなされることをよくご存じだったが、安息日のまわりにバリケードを築いていた言い伝えの規則という壁を打破するのにちゅうちょされなかった。イエスは、病気の男に立ちあがるようにお命じになり、それから「安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」とおたずねになった（マルコ 3 : 4）。善をなす機会があるのにそれをしないのは、悪をなすことであるというのが、ユダヤ人の格言であった。いのちを救うことを無視するのは殺すことであった。このようにイエスはラビたちの立場に立って、彼らに應對された。「彼らは黙っていた。イエスは怒りを含んで彼らを見まわし、その心のかたくななのを嘆いて、その人に『手を伸ばしなさい』と言われた。そこで手を伸ばすと、その手は元どおりになった」（マルコ 3 : 4、5）。

イエスは、「安息日に人をいやしても、さしつかえないか」と質問された時、「あなたがたのうちに、1匹の羊を持っている人があるとして、もしそれが安息日に穴に落ちこんだなら、手をかけて引き上げてやらないだろうか。人は羊よりも、はるかにすぐれているではないか。だから、安息日に良いことをするのは、正しいことである」とお答えになった（マタイ 12 : 10—12）。

スパイたちは自分たちが困難な立場におちいることを恐れて、群衆の前ではあえてキリストに答えなかった。彼らはイエスが事実をお語りになったことがわかっていた。動物の場合にはほおっておくと所有者の損失になるので、彼らはその動物を救おうと思うのであるが、人間の場合には、言い伝えを犯すよりはむしろその人間を苦しむままにほおっておくのだった。このように、神のみかたちにつくられた人間よりも口のきけない動物に対してずっと深い注意が払われた。このことはすべてのまちがった宗教の働きを例示している。そうした宗教は、神よりも自分を高めたいという人間の欲望から出発しているが、その結果は人間を動物よりも低いところへ墮落させる。神の主権にさからって戦う宗教は、すべて創造の時人のものであった栄光、またキリストを通して人に回復される栄光を、人間からだましとるのである。まちがった宗教は人間の貧困、苦難、権利などを気かけないようにと信者に教える。福音は、キリストの血によって買われた者として人間を高く評価し、人間の必要と苦悩をやさしくかえりみるようにと教える。主は「わたしは人を精金（一せいきん：不純物のない純粋な金属）よりも、オフルのこがねよりもとうとくする」と言われる（イザヤ 13 : 12・英語訳）。

→欽定訳：I will make a man more precious than fine gold; even a man than the golden wedge of Ophir.わたしは人を純金よりも尊くし、オフィル（→アラビア半島の南西部の金の産地）の金のくさびよりも尊い者にする。

安息日に善をなすのと悪をなすのと、またいのちを救うのと殺すのと、どちらが律法にかなっているかという質問で、イエスがパリサイ人に迫られた時、彼はパリサイ人を彼ら自身の邪悪な目的に直面させられた。彼らは、激しい憎しみをもって、イエスのいのちをねらっていたが、イエスはいのちを救い、民衆に幸福をもたらしておられた。キリストがされたように、苦しんでいる者を安息日にいやすよりは、彼らが計画していたように安息日に殺す方がよかっただろうか。神の聖なる日にすべての人に対する愛を心にもち、その愛が憐れみの行為となってあらわれるよりは、心の中で殺人をする方が正しかっただろうか。

イエスは手のなえた人をいやすことによって、ユダヤ人の慣習を責め、第4条の戒めを、神がお与えになったままの立場におかれた。「安息日に良いことをするのは、正しいことである」とイエスは宣言された（マタイ 12 : 12）。イエスについて文句をいっている人々が神の聖日をけがしていた時に、イエスは、ユダヤ人の無意味な制限を一掃することによって、安息日をとうとばれた。

キリストは律法を廃されたと主張する人々は、キリストが安息日を破り、また弟子たちが同じことをしてもこれを正しいとされたと教える。このようにして彼らは、[あさがし](#)をしたユダヤ人と事実上同じ立場をとっている。この点において彼らは、「わたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおる」と宣言されたキリストご自身のあかしと矛盾している（ヨハネ 15 : 10）。救い主も弟子たちも安息日の律法を破られたのではなかった。キリストは律法の生きた代表者であられた。キリストは一生の間律法の聖なる戒めを1つも破られなかった。あかしの国民でありながら、イエスを罪に定

める機会をねらっていた彼らをごらんになって、イエスは、「あなたがたのうち、だれがわたしに罪があると責めうるのか」と言われたが、これに挑戦できる者はいなかった(ヨハネ8：46)。

救い主は、父祖たちと預言者たちの語ったことを廃するためにおいでになったのではなかった。なぜなら、これらの代表者たちを通してお語りになったのは、キリストご自身であったからである。神のみことばのすべての真理は、キリストから与えられた。しかしこのようなはかり知ることのできない価値をもった宝石が、まちがった台にはめられていた。そのとうとい光は、誤謬に奉仕させられていた。神はそれらの宝石が誤謬という台からとりはずされて、真理のわくにはめなおされるように望まれた。この働きをなしとげることができるのは、神のみ手だけだった。真理は誤謬とむすびつくことによって、神と人との敵の働きに役立っていた。キリストは真理を、神の栄えをあらわし、人類の救いに役立つような位置におくためにおいでになったのだった。

「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない」とイエスは言われた。神がお定めになった制度は人類のためである。「すべてのことは、あなたがたの益」である。「パウロも、アポロも、ケパも、世界も、生も、死も、現在のもものも、将来のもものも、ことごとく、あなたがたのものである。そして、あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものである」(IIコリント4：15、Iコリント3：22、23)。神は安息日の戒めがその一部となっている十戒の律法を祝福として民にお与えになった。「そして主はこのすべての定めを行えと、われわれに命じられた。これはわれわれの神、主を恐れて、われわれが、つねにさいわいであり、また今日のように、主がわれわれを守って命を保たせるためである」とモーセは言った(申命記6：24)。また詩篇記者を通してイスラエルに次のようなメッセージが与えられた。「喜びをもって主に仕えよ。歌いつつ、そのみ前にきたれ。主こそ神であることを知れ。われらを造られたものは主であって、われらは主のものである。われらはその民、その牧の羊である。感謝しつつ、その門に入り、ほめたたえつつ、その大庭に入れ。主に感謝し、そのみ名をほめまつれ」(詩篇100：2-4)。「安息日を守って、これを汚さないすべての人について、主は、「わたしはこれをわが聖なる山にこさせ、わが祈の家のうちで楽しませる」と宣言しておられる(イザヤ56：6、7)。

「それだから、人の子は、安息日にもまた主なのである」(マルコ2：28)。このことばは教えと慰めとに満ちている。安息日は人のためにつくられたのだから、それは主の日である。それはキリストのものである。なぜなら「すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、1つとしてこれによらないものはなかった」からである(ヨハネ1：3)。キリストは万物をおつくりになったのだから、キリストが安息日をつくられた。キリストによって、安息日は創造のみわざの記念として聖別された。安息日は、キリストを創造主またきよめるお方としてさし示す。安息日は、天地の万物をおつくりになって、すべてのものを保っておられるキリストが、教会の首長であられるということ、またキリストの力によってわれわれは神と和解させられるということを宣言している。なぜならキリストは、イスラエルについて語って、「わたしはまた彼らに安息日を与えて、わたしと彼らとの間のしるしとした。これは主なるわたしが彼らを聖別したことを、彼らに知らせるためである」と言われたからである(エゼキエル20：12)。だから安息日は、われわれを聖としてくださるキリストの力のしるしである。

そしてそれは、キリストが聖とされるすべての人に与えられているのである。キリストのきよめの力のしるしとして、安息日は、キリストを通して神のイスラエルの一部となるすべての人に与えられているのである。主はまたこう言われる、「もし安息日にあなたの足をとどめ、わが聖日にあなたの楽しみをなさず、安息日を喜びの日と呼び、主の聖日を尊ぶべき日となえ」るならば、「その時あなたは主によって喜びを得」る(イザヤ58：13、14)。安息日をキリストの創造とあがないの力のしるしとして受け入れるすべての人にとって、この日は楽しみとなる。彼らはその中にキリストをみいだし、キリストのうちにあってよるこぶ。安息日は創造のみわざをあがないにおけるキリストの大いなる力の証拠として彼らにさし示す。それはエデンの失われた平和を心に呼びもどすとともに、救い主を通して回復された平和を告げている。こうして自然界の事物の1つ1つは、「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」とのキリストの招きをくりかえしている(マタイ11：28)。

## 【要点】安息日— 創造とあがないのしるし

上記（安息日 各時代の希望 第29章）の要点を整理しました。

▶安息日は、創造の時に神によって聖とされた日です。天と地、そしてその森羅万象が完成したとき、神はその業を見て「良しとされた（極めて良かった）」とされ、喜びのうちに休まれた（創世記 1：31～2：3）。安息日は単なる休息の日ではなく、神の力と愛のしるしとして、創造のみわざを記念するために与えられました。また、自然界の美しさや秩序を通して、われわれは神の永遠の力と神性を認識することができます（ローマ 1：20）。鳥のさえずりや木々のざわめき、海のさざめきに耳を傾けると、わたしたちはエデンの園でアダムと語りあった神の声を今も聞くことができ、そこに慰めを見いだすことができるのです。詩編記者が「主よ、あなたはみわざをもって／わたしを楽しませられました。わたしはあなたのみ手のわざを喜び歌います。主よ、あなたのみわざは／いかに大いなることでしょうか」と歌ったように、安息日は神の偉大なみわざを喜び感謝する日なのです（詩篇 92：4～5a）。

▶また、安息日は人のために定められたものであり、「人が安息日のためにあるのではない」とイエスは明言されました（マルコ 2：27）。すなわち、安息日を守ることは、形式的な律法遵守ではなく、人の必要を満たし、愛とあわれみに従って行動することにあります。イエスは弟子たちが安息日に麦をつむ行為を行ったときも、これを正しい行いとされました。さらに、手のなえた人をいやすために安息日に行動されたときも、律法を破ることはないかと教えられました（ルカ 6：3～4、マタイ 12：12）。人を救い、助け、慰める行為こそが、安息日の真の目的にかなっているのです。

▶安息日は律法の中で具体的に示されましたが、その起源はシナイ以前にまでさかのぼります。イスラエルの民は、エジプト脱出の途上で、既に安息日の知識を持ち、この日を守ることによって神との関係を確認しました（出エジプト 16：28）。安息日は、イスラエルを偶像礼拝から離し、真の神の民として区別するしるしともなりました。信仰により聖なる者となることで、安息日は神の礼拝者である証となるのです。

▶安息日は形式だけで守るものではありません。律法を人間の利己的な考えで縛り付けたラビたちのように、安息日を規則に変えてしまうと、その本来の意義は失われてしまいます。イエスは、安息日を守ることが、人を神に近づけ、愛とあわれみを示す機会であることを明確に示されました。安息日は、神の愛と力のしるしであり、人を救いと慰めに導くために与えられた祝福の時なのです。

▶天と地が続く限り、安息日は創造主の力のしるしとして続きます（マタイ 5：18）。新天新地においても、すべての人々は安息日を守り、礼拝の日として神の前に集うことでしょう（イザヤ 66：23）。

安息日は、人のために与えられた神の贈り物であり、神との交わりを深め、神の愛とみわざを喜び感謝する日として、今も変わらず尊い日なのです。